

5 6 7 8 9 18
60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18

始

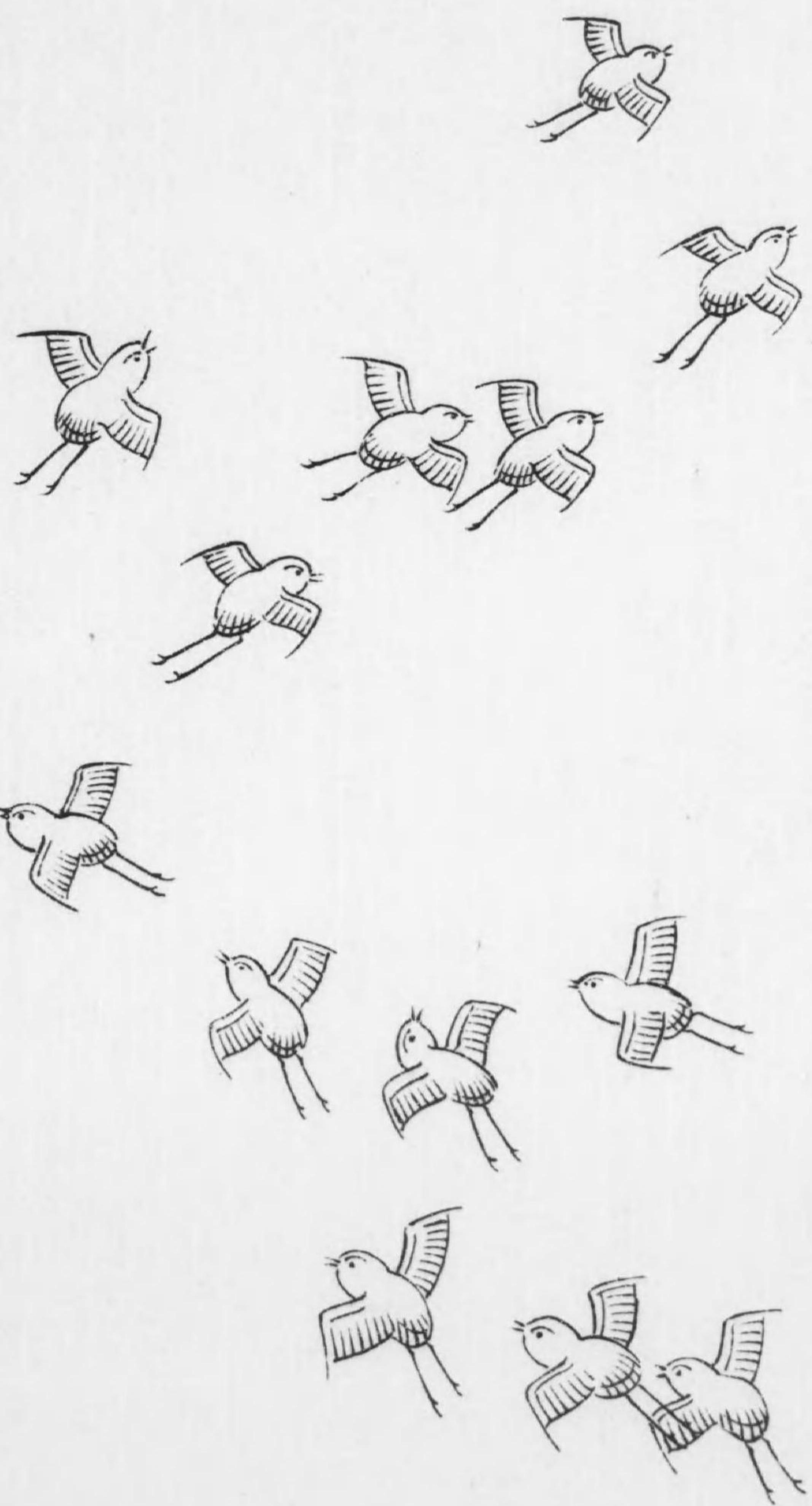


特 116

111

竹生島
大佛供養
猩々
紅葉狩
羽衣

111
111



竹生島

汎

説

竹生島明神に奉詣し其寄精を揮することを作れた神事能なり。能にては最初に玄の竹引物を稚子方の前に出し、次第の手を稚せばワキ、ワキツレ(三大臣)出で、次第名束にて竹生島參道の意趣を述べ、道行にて京都より鳴の浦に至る道程を渡ふ。次て船の作り物をシテ柱の前に出で、シテ(渡産)ツレ(女)出でゝ之へまりサシ一セイ等を渡ふ。ワキは釣舟の来るを見て便鉤を見よ、船中巻はしき湖上の風光を賞する誰ありて島に着し、渡翁業内して辨才天は女解ひうとて其神態を語り、女は忽ち社壇の内に入り、渡翁も亦浪に入るとて静かに坐す。間輕言ありて出端の稚子あり、地産は脚殿類りに鳥動いて天地異様の状景を置す。渡ふ時、作り物の轟を下せば天女(後ツレ)端然として言の内にあり、找は此島の辨才天とて宮より出て天女の舞を舞ふ。餘れば月澄みあたる湖上に風立ち波跳ぎ、急調の稚子につれて龍神(陵主)出現し、社巻なぞ舞歎をなし、天地に飛躍する状を演じて以曲を終る。前半は流麗優美、後半は壯麗勇烈なる曲なり。

謳方、節報、記入の解説

脇能としては佐の軽き方なり、重く多くは却て重てからず。前シテは常の渡翁と略同ト佐にて少しく抑へ静かに渡ふ。後シテは龍神なれば佐進みて力強き弱きしき所あるべからず。ツレは前段一人にて渡ふ處はシテよりも高く軽めに、同吟の處はシテに從ふ。ワキは素證にては一人、力ありてきらりと渡ふべし。

次第(一段末)此次第は健やかにさらりと渡ふべし。生るは「シマル」とソトを軽く發音す

べし。第二句の「鳥」の「の」は少一柳へて扱ひ次句へ落ひ續く。「鳥」の「の」は下ノ中、「ま」は同音位にて廻す。「指でしの」「もオレ」は中を抑へて出す。

墨らぬ、闇の宿屋を候と拝る、にほの（一枚裏）道行中に廻シ節四箇所あり。「墨らぬの」は上ノ廻シにて廻したる後の一音尾を音首と同音位にして別に下けず、「闇の宿」の「の」は廻シ下ゲされば音尾を中音に下ぐ。但し廻吟にては上音と中音と音階の差極めて遅ければ耳立つ程下ぐるにあらず。『舞みの「み」は中廻シにて、前の上廻シの如く廻しを張ら本、且つ打切の處なれば「み」の生々字を「イーイ」と二段に説い下ぐ。又廻しの「にほ」のオは下ノ中の音位にて廻シの形は上廻シに同じ。

遠揚の（同）「オ」の入は上音より一音階高く飛り上げ、次の「さ」は前の上音に復す。
山越庭き志賀の里（同）「遠揚」をたつぶり引いて淳かせ心に施め、「志賀」は別に下げる。がふ
はオサヘにて少し抑へて落ふ。常に廻吟上最の中音位の桂句の前にある節附なり。

暮きにけり鳴の浦にも……（同）「暮き」のハルにて上音となり、「けり」中音、「鳴の浦」下ノ中、「にほ」以下、下音となるなり。

一聲（ニね裏）能の時の雅子の辛。翁附き能の場合には真の一聲にて出づ。素詮に間係なし。
半なれば、海の面（同）「ル」は「おも共」に二字落なり、「ル」を廻シの如く突き込み生々字を極く
小さくして「ば」に移る。畢竟二字落は一字落を二字に落ふものなり。

ウレ震ふ震れる（同）十六とツレ單獨の譜はシテナリ調子高く軽くに扱ふ。波してシテの

位を握すべからず。

朝ぼらけ（同）此廻シ下ゲは常ういは少一多く下ぐ。こゝ迄はサシの調子なりしを次は調子を更へて一セイを落ふ故なり。

一セイ（同）前の一声とは異りて落方に於ける一種の脚、一セイの落方は位大きくすべて

舟の道（同）廻吟の入廻シは船に傍く當るが如くに出て、普通の上廻シの如く廻す。
うきわぎ（同）「き」の入廻シ奇の「の」と同ト。「わ」のクリ亦船を當るが如くし、其儘「き」に使く。

うろくづの（同）「づ」の二字落なれども二人同時に移る處なれば「づ」の生々字より後を少し抑ふ。
忙びぐ人の（同）「び」との「ど」にて下ノ中に落し、其音位にて「の」の廻シを落ふ。次の「暮れても」も同じ。
落るこそ（同）「落」の廻シに下の記号あれば下ノ中にて廻し下音に落し「ごと」に落く。

もの憂りれ（同）「ふ」は落帶に係りては「と」とあれど落すにあらず。小節に扱ふなり。「け」は廻して軽に下音に落す。

上巻（同）「落許多き數々の」の遣しはシテ落は下、ツレのみにて落ひ、浦山かけてより再び二人同吟す。此上巻の節附前の道行に略同じ。（道行も本上歌の一聲なり）準にて知るべし。心たかく風もなし（三ね裏）落より柔々となり、「風もなし」をイロに落ふ。節附うち中のイロは詞の開キに略同じ。但し此イロは老人なれば餘り大ならざるを宣しとす。
さく波ゆ（同）杭潤の場合は「サ」と清みて落ひ、實際の波の場合は「サ」と濁るを聞とす。
痛はしや（同）「や」のイロ本ミはヤラの同あれば「ヤーハーンー」と大きく落す。
國は遙江の（同）「オ」の「う」はスクビ落シなり。ヲの記号あれど常の上音以下に落すにあらず。二音前にて用意し、一音前を上ノウキの高さに浮かせてその處を上音に復するなり。故にスクビ落シは又上落シとも称するなり。次下の「更本」（一枚裏）も之に同じ。
春むれや（同）「れ」はウキブリと称する節にて、其前の字「な」の音尾より浮く心持にて、「れ」は浮きたる這アリを落ふなり。之と同形の節附にて、其前の字「な」の音尾より浮く心持にて、「れ」のあれど、詮ひ方には別解なり。
都の富士見れや、此良のねあろしゆく（同）某今にて一つの如く廻シ節の前字にイロ附き

腸能

竹生島

三
用

ワシツ
キテレ
官龍
人神
(前ハ女)
漁翁

早次第上 柏子ミ合ア
竹よすう。は鳴の竹
せ島諸急ガ
折れハ近喜の聖
代よ仕へ奉り臣下も
島の明神。靈神。之て應應向。此度
君よ歸暇を申し。唯今竹生島よ
官仕レ
道行上
四の宮也。河原の宮庄ホ

居る時は必ず廻したる筆の生字を一音階表すを法す。又廻シに下の記すあれば次ぎの字を下げるは筆續け、下の記すなければ次の字原音に付す。即ち「寫士ヲ」は廻シの後下げるは筆續けやに終て「あわい吹く」は「」の廻シを下すに當して「吹く」を中音に度す。又上者にて進み降る陽音の一一つは一又は其前字より浮かせ、中音にて進む来る處の一一つは又は其前字より浮かせて又を通則とする。

なきものを（五枚表）中落しに該す。サシの中落しは略普通の中ノウキの音位に同じ。中青よりは少く高。

あれば人間に、社壇の（五枚裏ヨリ六枚表）ア消レ廻シには必ず次に、を添ふ。字既の關係上つ廻シの筆半を極めて小さくし、既と既は本して直に次り、に密接せしめ、二つの節刀、を普通の廻レ「一箇だけの長さに達するものなり。これは常に多く筆者の筆にあるものなり。」これは廻シの筆を横ねて「ン」を添へて進ふと見るも可なり。即ち「にーイン」た「アン」の如し、清度のちかひ（七枚表）此節附を二般落しといふ。「さ」は中音、「度」は下ノ中、「」の以下は下音に該す。筆者の胸にてす音より下ノ中に、下ノ中すト音に接けモ二般に落つる教訓くぬづくアリ。

はやき。河原の宮庵まはやき。春もき井
の水の日。墨らぬ。古代よ遠坂の開の
宮庵を休。拝み。み越ゆき志賀の里。
鴻の浦。も著。さくよけり。鴻の浦。も
つまよけり。早行。急ま。程よ。鴻の浦よ
著きて。あいを見ゆ。釣舟の。あう。い。
軽らく相待ち。便船を乞ひ。やと存ひ

す。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
真ノ一聲。コイ合。押子合。大。シテサシ。上
あも。うや。墳。ト。弥生の半。もれ。渡も
うら。よ。海の面。二字落。位木。カニ。一
らけ。長。用。通。よ。舟の道。うき
えス。う。わざ。とき。あき。心。わ
ほみ駆。れて。明。暮。運。よう。う。う。う。の。數。を
つづ。て。身。ひ。どう。を。助。け。や。せ。し。と。宿
人の。ひま。も。食。向。よ。明。け。暮。れ。て。せ。を

●小説

度カタマリりとこそ。もの憂けし
 打切カタカタ下歌中氣カヘシガトウト
 トわざもあらせよとえたりも此海の
 上歌シツカリ打切カタカタ名所多き數カズカズよ。
 上歌シツカリ打切カタカタ名所多き數カズカズよ。
 浦山シラヤマをきて眺シテむ。志賀の都花園シカグサ
 舟ボウあづらの山櫻シマツバ。眞野マニワのじいの船呼ボウコウ
 まひ。じかかよせて人間ヒンカンをいがく
 よそへる。早舟ハヤボウ

便船申セシナのう。渡ワタシは舟ボウとも
 あ。脇カタマリへ釣舟カモロも。よ。ともとも
 鈎舟カモロと見てひぐみと便船セシナ申せ。と
 は竹生島チクボシマよ。おめで。集詣シヨウケイの者モルヒ。誓カミハシメの
 舟ボウよ。東アキからか。けよ此處コロコロに靈地シラギ
 も。歩ハシを運ハラフひ給ハサフく。さあく申ハサフべ
 申ハサフべ。あらも違タガひ。又アシ神カミ慮ムカシも計カウりがた

ツレカニ上

おらドお舟を乗らせん
早舞^{アマハラフ}やまてん

一宇落

シテ

迎の舟。去のかと覺えたり

浦^{シマ}
ふ

迷更長向^{ミタマサカタマ}て心よめの風もも

地平歌中^{シトリト}

カヘテ

合^{カハ}持^{カハ}竿^{カハ}

シ

ト

リ

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

ト

たまつよもひや勝つてありがたき。不思議
也。此島。女人禁制。とこそ爲つて
いよ。あれある女人何ぞ。來らへてゆき
シ。あれ知らぬ人の申し事。そも
此島。久しく以來の。宿再び。號よ
サ人を。来づけられ。ツレカニ上ト。一
も。までも。も。までも。までも。
ち。下。地上。サラリ。辯才天。女體よ
も。までも。也。辯才天。女體よ

才天女、女體も。其神德もあらう。天女と現す。あちまをば。女人こそ隔
あ。唯知らぬ人の言葉あり。悲願を起して。まじ覺え年ひす。あく
つうわうの吉へよう。利生更よ急ら。も。けよ。やほど羨も。荒磯島のね
蔭と便よ。まうあま小舟。われり人。

向よあらぞとて。社壇の麻を押し。
向ま。居殿よのらせ給ひけり。翁も
水中よ。のかとみ。自はの立ち障り。
われれ此うみの。あるとぞとさひ捨て。
また。食よみらを絵ひけり。

トケモヨキ。持れり。此島よもじんで

神をもひ國を守る。辯才天そん。我事
あり。其時虛室よ音樂同樂。其時
虛室よ音樂同え。花あらう。春の
夜の月よ輝く少女の絃。かへをさへとも。
まもろや。
天女舞上 夜遊の音樂も時過
ぎて。夜遊の音樂も時過ぎて。月をみ

度つ。御づらよ。復風漸よ鳴動して。
十界の龍神。思れたり。
早苗 龍神御上よ
出現。龍神御上よ出現して。光も
輝く金銀珠玉を彼のまへ人よ。捧ぐ
け。き。あり。かたかりける。奇特。さも
濟度の地。本より衆生濟度の地。本より衆生

かたちを覗ト。有縁の衆生の所願を
 もとへ。又ト界の龍神とあつて。國土を
 鎮め。誓をあらわす。天女は宮中よしらを
 終へ。龍神はもどち御水よ飛行して。
 ばけたて。水をかへて天地よむらが
 美蛇のかたち。天地よむらがる大蛇の
 かたち。龍宮よもんこそ。へりよけ。

大佛供養

汎説

平家滅亡の後、其遺臣惠七兵衛景清、常に頼朝を討たんと謀り、南都大佛供養の日、社人に誓して頼朝を組ひしも登見せられ、終に宿志を果さざりしことをわりし曲なり。能にてはツレ(母)先きに生を隔てたる。次第打ナシテ(景清)登場し、次第名乗手と謹ぶ。春日野に佐佐木すと云ふ母を尋ねて被引をなし前段を終る。(中入)後段はツレ(頼朝)ワキ(從毛主衆)ワキ(レ三人)を経て大佛供養の旨を謹ぶ。春日の社人に慶装する景清又一声にて出で、頼朝に近づかんとして、洋衣の透間より漏る。武具の光に見顯はされ、寄り来る者共を刺り拂ひしが遂に打撃して石板あき丸すり通り出づる窮に墜れて身を脱すに終る。四番目にして此二番に代用せらる。

證方、節扱、記入の解説

此曲は小袖雪残の始めと夜討雪残の後とを接せたる如き趣あり。現在物の勇はなら同に武士の情を想解し、全体のそらりとしたる中に比較的變化に富むる曲なり。前段は母子被引の悲歎場なれば辭がた、後段は雪はなら場面なれば手話くある也。次第一段(草)静かに唯りと云う。組曲其者が軽きものなればさまで往を歌ひに及ばず。草の名に聞きて(同)上音の場合に一つある時は必ず其前字を淳かす。中音の場合の一つは前字を淳かさず。故に「草」の「の」は淳かせども、第三句の「思ふや我が」の「ふ」は淳かさず。いかなれば(二段表)「か」の色廻シ、中に含す。サシの最初の下はすべて中音となり、組しサシの音陽は普通のと多カ黒りてほド他の中ノウキに同じ。カヘテ(二段表)サシナリ下歌に移る時は音調を變り、文字の運びも変うればカヘテと記

入せらるり。前よりは静かに進ふ。

神も音とへり。(同)「かみ音音より張る。」教へのの、^一音尾を落かす。

駐座喰く(同)「なにイロあればナーノ」と音尾の當りを大きく進ふ。

起きあせす(四枚表)「か小節なり。小節は生二字を小さく出すすり。

寝もせす(同)「カールより上歌調に移る處なれど、其は前へかけ、音調を変へすに出す。

母もあはれと(同)「出少し厚き、強ど音を切らすにあはれと別に出づる心持に進ふ。あは

れは十分にこころを張る。」

一門の舟の内(同)「此上歌第一章、景清と同文同節なり。」これは彼れより稍きらりと振ふ。餘り調子を抑へ木に確かりと。

かもうらやまれなりし身の(五枚表)「さがのハリナリ次第に浮かせ、れと掛ケ下ヶに十、掛

ケ下ヶは一字にて上音より中音まで落すなり。

頬もとき(五枚表)「き」一字落なれど地派しの處なれば生二字を中音で抑ふ。

世に落れなき大物藍(同)「セイなれど前段とは苟曲一轉して大佛供養の場なれば、前段と

は全く違うて、勢つておらりと進ふ。

あひにあふ(六枚表)「あふ」二字舞の形を「あ」の生二字より少しおいて抑へて進ふ。

面白や豪良の部の(六枚表)「サシの調子にて勇健にさらりと進ふ。前シテナリも一層しつか

りとあらべし。

言人の(七枚表)「これナリ心特別にナリて、一セイの調子にかへてかゝつて進ふ。

神だに喰(同)「お三ツ挂り、ちてはて印(振りと中廻し)に同じし。

燃養の場に立出づる(同)能にては左にて言人に吟せる景清、腸産の床几にかけた頬朝

を此と見、筆を落とすりかゝると、ワキ見立すり早く其間に入りて進る、ワキは景清の二

へかけて手毫く進ふ。

三里後に下がるを見つ「これは何者なれば」と進ひせずだり。

のう水波の陽と(七枚表)「のう」は前へかけて出す。

鞠つまつたる(八枚表)「前へかけて出で、此一章十分に氣をかけて進ふ。

名のれ名のれ(同)ワキが刀の柄に手をかけシテに詮寄る處なれば其心にて、二度とも前

へかけて手毫く進ふ。

隠れけり(同)「ステルと称し、極く短かく詮めて進ふ。

いかにやいかに(八枚表)「主東に向つて下知する處なれば、強く確りと組し別に聲を高め下に。

坐もくこれは(九枚表)「大勢に向つて右のり上ぐる處なれば、うせつかず、聲上づらぬやうに堪へ進ふ。シテ最後の句なれば最も勇健なるを要す。

景清と(九枚表)「勢のかゝれる处の前の一字落なれば、しつかりと大きく進ひ、生二字を少しおふ。

あのりもあへす(同)「確わりと受けて出づ。以下修羅ノリ(又は中ノリ)と稱して殊に勇ましきノリなれば、力めて氣抜けぬやうに進ふべし。

四五二番目

大佛供養

九月

立ワ子シツ
秉キ方テレ
從源賴朝
者

シテ次第上
ヨウフク
拍子三合ア
わまく一
わまく一
草の左よ向きて。わまく一
草の右よ向きて。忍ばや氣も身も

らひ
とれハ平家の侍悪七兵衛景

清もとい。われ此向ハ西國の方よひ
も。宿願の子細あうよう。此程まか

り上り清水よ一七日某籠申してい。又

おひよよかう

承りづへば。南都大佛供養の由申る。
某も若草邊より母を一人持ちてゆ

程よ。ややうのきうち。貴賤よ仰れ。

向顔のため。唯今南都へと急ぎ。 拍子三合六
サン上シツカウト大ギク

あやれ。やけよまへ。す。も葉う花。 紅葉の。壽永の秋の。い。あれば。思を
ぬ風よ誘ひて。ナ。も駄。す。都

の空。ひきや。鄙の憂きともまし。 撃カヘテ。下表カヘ精ジカニ
拍子三合六

擊がね船の。やひも。もくら。の家よ
生れ来て

打カタ。三笠の森の。やげ。頼む。 森カタ。元カタ。元カタ

三笠の森の。やげ。頼む。其は。まひ。神も教の
らぐて。未だ此せの。あ。まひ。神も教の
牡鹿鳴く。春日の里よ著。まよけ。春
日の里よつまよけ。意まひ程よ。

南都若草邊よ著きて。此あたり
みて。アヤシイを尋ねざりと存ひ
ツレサギカニ
さて。も我が子の景清。此程しづくよ
あらやし。南無^{ハタハタ}やニセの諸佛^{ハリ}。我が子
の景清。ごたび連^{ハタハタ}をせて賜ひ終へ
シテ白シカニ
うよ案内申ひ。我が子の聲^ヒと
聞くよ。覺^{ハタハタ}を極^{トボシ}よまし出で。

景清あるかと悦べぞ。暫らく。あたう
よ。アヤシイ。某^{ハタハタ}をかく作せられ
あ。いよそい。シテまづともたへ度^{ハタハタ}
く。さて。此程ハジヅムよひつゝぞ
シテシカニ
さんば西國の方よひ。宿願の子
細あるよ。都より清水よ。朱籠
申ゆ所よ。大佛供養の由^{ハタハタ}程よ。

貴賤よ紡れ。御音
傳の音よ集うて。
氣ヲカナ、サナリ
來う餘ハテシひ。又聲ね申さゞき事モノの。
つまも申さゞき事モノの。
シテウケテ
き仕オオセやる。何事ナシトも申し上アゲり
ござりて。眞マサニや人の申さゞ。頼朝ヨリトモ
ぬ。申スルも。聞カセひて。が眞マサニも

いか
シテ カケテ
とれ思ひよくな仕事
さうあがら。西海まで亡び給ひ
の。アムラ
の。アムラ
申すもあまぐさと。思へたね
申すもあまぐさと。思へたね
ツレサブリ
申すもあまぐさと。思へたね
申すもあまぐさと。思へたね
黒髪も眞人屬け経へか
シテカハシタ
國よ繁
ニ字善
家舟の。教經の。アムラ
供申すも
て、

物を思へど、起まらせを
せで寝をと明一やね。この身を隠す
かじもあく。景清が心のうち。母も哀と
思一めせ。上歌 一行の船のうち。下歌 一行の
船のうちよ肩を比べて膝をくみて。處
狭くをむ月の。景清ハ誰よりも苦難
船よあくて適ふま。一類その次下

食略すまくよ多ひれど。名をどう
揖の舟よ乗せ。至徳隔なかりん。
すも義まじたう。身の。騒驕も老
いぬ。ぞ駕馬よ劣らぬかあり?
はや更の明けては程よ。暇申ゆ
さまべて。身よく。慎みて。重ね
て。もう終よ。一押子食 げよ。ありがたき

母の慈悲。御前のも頼も一とき
地主喪シテトリト 拝子ニ合ハグ 作ハラツ の森の雨露ハラス。作ハラツ の森の雨露ハラス。
梢ハラス も鳴ハラス も我ハラス 袖ハラス を。ちほりわねたる
宿ハラス カム。立衆セイ 上サウ 拜子ニ合ハグ が元ハラス 元ハラス 宿ハラス と
共ハラス よ別ハラス れけり。宿ハラス と共ハラス よ別ハラス れけり。中入
送ハラス う。景清ハラス もあハラス も見返ハラス う。宿ハラス と
共ハラス よ別ハラス れけり。宿ハラス と共ハラス よ別ハラス れけり。中入
世よ隱ハラス れちまき。大伽藍ハラス 佛ハラス の供養ハラス 慈

ぐあう 五ノ子方サシ上ハラス ハラスモー
立衆セイ 上サウ 拝子ニ合ハグ 一室落
大将ハラス 賴朝ハラス そん 我ハラス 事ハラス あう 立衆セイ 上サウ 拜子ニ合ハグ 一室落
も此ハラス 院ハラス す。聖武皇帝ハラス の宮ハラス 建立ハラス 大
佛殿ハラス とて おもハラス まき 早ハラス ト 二ハラス この岩ハラス の
序ハラス 咸ハラス 之ハラス 今ハラス との あきよあひよあ
大伽藍ハラス の序ハラス 供養ハラス 大伽藍ハラス の序ハラス 供養ハラス
光ハラス うやく春ハラス の日の三笠ハラス の山ハラス よ影ハラス

高き。法の。沙聟の様もよ。供養をも
こそ。あり。せたま供養をもこそ。あり。
せたま。シテサシト 面白や奈良の都の時め
きて。どうく節つむ言。わへはそれよ
り。きあへて。敵を討ち謀を思ひ
己の。悪せ兵衛。景清と。よそよも
それどくや。白張津衣よ立鳥

帽子。げよわれあぐら思や。姿よ今
櫛の葉の。時雨降り。あくえ下よ。身
を隠す。べき便も。裏き身の黒ぞ
哀ある。宮人の。姿を轉る。猿衣
けふ。あうこそ。繩す。びへ。あそび
めぞ。神だよも。塵よ定をも。宮幸の。
供養の場よ。立ち出づる。どん何者

あひぞ虚空に向ひてまうぞ。そと退き
久シテサリ。これに春日カスガのち奴あるぢ。けふの
佛ホトケの摩モ供養。場を清キヨめの役人ヤクニンあるを。
何よ。さがめ給ふらし早カニ上サリ。春日祭カスガマツリよ
あらがこそ。これハ佛の摩モ供養ホトケのう
水波の隔ハタケと聞く時ハ。佛も神も同
一體。其上貴賤の事あるよ。何とて簡
み絵エハよべき早カニ上サリ。包むとまれど神ハ猶
君ヒカルを守りのモ威光カミヨウ。顯シラれけり。白
張ハタケの早カニ上サリ脇ヒカラより見ゆる具色ヒガサの金物カネモノ
光ヨセルを放つ。村物シロモノの鞘ササグサつまりトト。ト
詞ヒムのま。名のれ名のれと責めければ。顯
れたりと思ひつて。すみやうとして立ち
帰り。又人影よ隠れけり。言語道

断の事。唯今の者を、いわむる者ぞと
存ずてゆべ。平家の侍悪七兵衛景
清もそひ。さへ我が君をねらひ申すと
存ひ程よ。鑿固の者よ申しつけ。前ち
きうせをやと存ゆ 拍子合ハシマタ いきよや、いきよ
鑿固の兵アマニ たかよ聞スルけ。唯今見スル
きの者アリ はや計つ取スルてあらせよと。

さも高聲コトハツ よトハ 知スルまれば 地カミ 人ヒト
ひそそ。かねて用意ヨイの鑿固アマニ の兵アマニ 皆モ
同シテ。まも駆スル。 其時景清ヨシキ まも
生スル。思フやう。こそまも退スルまでへら矣
の恥辱ハヂ。ともあれ、まもひど。今ヒトタを力カニ
打ち合スルて、重カナて時節シケツを、續スルべと。
丈音タケイ あびて、呼フまくうけり。抑シテれ。

平家の侍。惠七兵衛。景清と。右の
りもあへど。あざ丸を。おのづもあへど。
あざ丸を。もさうと抜き持ち立ち向ひ。
大勢はわざてのひき。すこも固め
警固あらざも四方。ぐらうとぞ遁げよ
け。中よ若衆者進み出で。さう懸
つちやうとゆれど。ひらうと飛んで。

手もよよよ。忽ち勝負を見せよ
けり今。景清と。までありと。か
称念を致つて。かのあざ丸を。か
かざせど。霧立す。隱も。春日山。茂
みよ飛びぬ。落ちゆる。又こそ時
節。やうづ。びれて。虚室よ聲にて
せよけり。

羽衣

汎

衣

能にては最初ねり作り物を舞臺に出し、ねの枝に天人の羽衣に擬したる長袖を擇く。一声の雅子にてワキはツレ二人(共に渡支)を従へて出で、長閑なる春色に誘はれ約に坐したる鳥を詠ひ、浦の景色を眺めつゝある所に、ねにかゝれた羽衣を見より。家の實になきばやと取りて帰らんとする所にも、幕上りテシテ(天人)は「の」其衣は汝方にて體と呼びかけながら現れ來り、とは天の羽衣とて容易く人間に與ふべきものにあらざれば通し候へといふ。渡支惜みて通さず。天人は羽衣なくては天上へ帰ることかなはすと、いたく悲めりあり、渡支も憐を懐ふ。天人の舞樂を奏し宿はす通さんといふ。天人は衣を通されなば母はんといふに、渡支は衣を通さば母はすして天にすりやせんと疑へば、いや疑は人向にあり、天に偽なきものを取むべかられ、遂に衣を通す。かくて天人はかの衣を着(後見度に往き長袖を着す、之を物着と申す)月宮殿の有様を詠ひ、數々の舞を舞ふて天に昇るといふに終る。祝言歌の三百首目に用ひらるゝを常とし、詠ひものとして愛敬せらるゝこと二百首中の首推にあり、落曲文學としても千古の傑作なり。

謡方、節報、記入の解説

三際清見百士愛鷹の秀麗なる曉望を背景とし、春色豔麗たる曙の室に天女の羽衣を綿して舞ふといふ曲なれば、通つて夷やかに晴々としたる咏いあそぶ。上半の羽衣を美ひて悲も一般に全篇を計立つる為の文の後なれば真心を以て渋く憂愁に臨ひるを好ま下。景詠にてはワキヅレを要素、ワキ一人にて可なり。

詠ばらに、渡支にてが(二段表)ふたり告に二字舞、組しづは五しくは四字表なり。又「は

「その生ミ字より少し抑へて謳ふ。次はワキ、ツレとの圓音となまぐさ處なればなり。時もや（同）「ほ」の廻シ下ヶ僅かに下げて謳ふ。耳三つ程にトぐべから下。

ね原の（同）サシの句末の字直節なれば必ず引くを法とす。そウ引キの長きは一字長の長さに因る。たゞ節あると節なきとの相違にて其音法は同一ならざるべから下。即ち音にては前なら「起」、「晴れ」の一宇後と「時しもや」ね原の引キと同寸傍に謳ふべきものなり。

朝かすみ（同）「み」はフリたる後を更に倍ある如く謳ふ。天の原、曉にも（一枚裏）「ア」は下ノ中に差し、下ノ中の音位にて廻す。

心空なる氣色かな（同）「なる氣色下ノ中の音位、色のまゝの廻シを下音に處す。忘れめや山路（同）「りやのや」と山のみとも重ねぬやう、次のやと別に出す。

山路をわけて（同）「山路をわ下」中の音位、けで以下、下音。

ほるかに三深のが原に（同）「ほるかに」と節附あるも同様なり。「ほ」下音、下ノ中には厚かせが又下音となり、「に三深のま中音に上り、つ下ノ中、「ばらに」下音となる。此ね原には中音より下ノ中となり下音に下がるものなれば二段落しと称す。

立ちついきや（同）立ちは中音を少し抑ふる如くに謳ふ。「ル」下ノ中、立其音位にて廻し下音に下ぐ。通はん以下の音位別しておるべし。

のう基永は（ニヌミ）「の」の呼びかけは静かにせず、大きく、ワキの謳ひ方より直ぐに出すは宜しくからず、一息間を置きて寛やかに出すべし。以下シテの謳、天女なればよて殊更に女性的の声を真似るは非なり。十分に力をこめて声の扱ひを静かに角立たぬやうあるべし。せんかたむ（四枚表）「たまは中落しなり、カルの中の中落しなれば歌普通の中ノ厚キの高さに差すなり。

かぎこのはな（同）「ほ」のクリ、後をつけて張り上げ、「ほ」の入り廻シはクリの音位を續けて地め手、廻シの後の生ミ字とアーハーと段をつけて謳ひ、上音に下ぐ。

宝殿戲ひて行く（同）「まだひと」のま中音にて廻し下音に下がり、「て」は下音にて廻す歟、廻したる後の音尾は呂音に廻し、行くには下音に謳す。

力へズ（同）普通サシより下張に移つた場合は音調を更ふるものなれど、茲は「ねらす」の下音の音調を基げ、「詠み馴れ」と中音に出て、別に音調を変へざるとして特に力へズと記入せらる。静くかかへるか（四枚表）「ゆくか」を少し詠り、「帰るか」とけるやうにしがかを連續せしむべからず。所謂「切る切らず」に謳ふべき處なり。帰るかの「が」は城ヶ下げに謳ひ度す、下のセ役表「春の晴」も意に同じ。

物語（五枚表）能の時シテ羽衣に擬したる長絶をワキより更取り、後見度に往きて之を看るを云ふ。素證にても少し間を置きて次を謳ひ度べし。

舞ふとかや（六枚表）「とは小節なり。生ミ字を極めて小さく出す。

東遊の藍河身（同）地次第なれば、前の力、ルとは調子更りて後く、且つ上音なれども力

カリ（同）クリの前ならサシの前にある短き章にて、クリ入音の節ありて中音に終る一種の躰・シテスはツレより謳ふと、地にて謳ふとの二種あり、地にて謳ふとクリ地と称す。クリ地はクリ入音の節ある處は大きく、直節の處は運びて謳ふ。

聖地是方の（同）「モ」の振り、音尾を厚かせ、「れ」のクリ、後をつけてクリの音位まで高り、其潤子を地めすして「え方の」まで謳け、「の」の入廻シを謳ひて上音に謳す。柔音のクリ地に入り廻シと普通の入り廻シとは斯か其謳方を異にす。普通のは入りの後の廻シを小さくし、クリ地の場合のは入りの後の廻シを大にす。ナフ、鳥づけたり（同）「解づけたり」と節附あるも謳方は同様なり。

はる霞（六夜表）クセの様め、春のばは呂音に出て、「る」より下音となる。

げに花かづら（同）このね原の（七夜表）「げ」は中廻シにてアリの大なるが如く詠ふもの、次の「ご」はイロ廻シなれば廻シの後の音尾、下音に當す。イロ廻シの句頭にあること稀なるを以て往々中廻シに詠ひ渡るものなきにあらず、前の「げ」とは全く別なり。

まわに春モ（同）「さ」に間の記入なきを以て引かず、美しく説ひ切る。上端の句末の字を間の記入なきも引く人あり。注意を要す。

聞くもたへなり（七夜表）「も」の入り廻シは次に再びクリあれば廻シの音尾を下げて又一寸浮かしたのクリに詠く。

謡日（同）「ド」の「」の中廻シは中ノウキに詠す。

大聲鼓（八夜表）「豆」の節は三ツエリなり。「シ」、「イ」、「エ」の如く三つのエリは中廻シの形の如くして大きく振るなり。

あづか盛の（同）「づ」の入り廻シはクリ越にある入り廻シと同様大廻シに詠ふ。序の舞、破の舞（同）序の舞は静かに上品ちる五段の舞にして笛を基本とし大小鼓之に附合ふ、太鼓の加はざと加はらざるとあり、羽衣には太鼓あり。破の舞は極めて簡単なる舞なり。昔に能の時シテの笛につれて舞ふものにて、歌の伴はるものなれば勿論諸方に圓通なし。ワカ（同）ワカは舞（又はイロエ）終りてシテの詠ひ出す一節にて、其詞子はほじ一セイに似たるものにて、常に暢び／＼と若やかに詠ふ。

または春立つ（同）「またたつ」の近共にアリのスクと詠しなり。これは音廻のスクと詠しより少しきれいに詠ふ。

巻をかきしめ（同）「な」は昔にアリ入りなり。アリつゝ入りを詠ふなり、「き」は次に直ぐアリあるを以て常の如く上音まで度々十上ノウキの音性まで下りて次の「か」のクリと詠ふ。

三番目

羽衣

三月

ワシテ 天女

早^{上池ミナク唯}
風^{三人タク}早^上の^{カサ}三保^{ハヤ}の^{カサ}うらわ^{カサ}を^{カサ}漕^{カサ}ぐ^{カサ}舟^{カサ}の^{カサ}漁^{カサ}人^{カサ}
拵^{カサ}ぐ^{カサ}ば^{カサ}路^{カサ}か^{カサ}る^{カサ}
白^{二宇喜}龍^{二宇喜}と^{二宇喜}申^{二宇喜}を^{二宇喜}魚^{二宇喜}夫^{二宇喜}よ^{二宇喜}り^{二宇喜}萬^三里^三の^三海^三山^三よ^三
雲^{モタナ}忽^{モタナ}ちよ^{モタナ}起^{モタナ}り^{モタナ}。一^{モタナ}樓^{モタナ}の^{モタナ}明^{モタナ}向^{モタナ}よ^{モタナ}雨^{モタナ}始^{モタナ}め^{モタナ}て^{モタナ}
晴^{モタナ}り^{モタナ}。げ^{モタナ}よ^{モタナ}長^{モタナ}雨^{モタナ}ある^{モタナ}時^{モタナ}も^{モタナ}や^{モタナ}。春^{モタナ}の^{モタナ}氣^{モタナ}色^{モタナ}
ね原^{モタナ}の^{モタナ}は^{モタナ}立^{モタナ}も^{モタナ}づ^{モタナ}く朝霞^{モタナ}。日^{モタナ}も^{モタナ}殘^{モタナ}り^{モタナ}の^{モタナ}

天の原。及びもき身の眺。も。ひそら
ある氣色。かる。ト取中サウナタシタ
指子ニ合フオカヤ忘れぬ。山路を
わかつ。晴見鶴。遙よ三保の松原よ。まち
つれさや通じん立すつれ。さや通じんうら
上歌サウナ

風むか。雲の浮はたうと見て。鈎せど人や。啼。うらし。
浮はたうと見て。鈎せど人や。啼。うらし。
待てまく。春からく吹くもの。さけまく

朝風の。ねい常磐の聲。さや。はへ
音あき。朝あきよ。釣人。まき。小舟。かる。
釣人。まき。小舟。かる。早弓ハツキリト
原よ。浦の氣色。あがむ。所よ。
虚室よ花降り。音樂向え。靈香。四方よ
薰む。これたゞ。と思ひぬ所よ。これ
あねよ美。とき衣懸け。寄りて見

れば色香妙にて常の衣よあらま。
いさなまぬうて停り古ま人よも見せ。
家の寶ともすむと存ひ。のう其
衣は此方のうそい。何によどむれゆそ
早^{サナリ}拾ひたる衣よそひ程よ取りて停り
ひよ。到^{シテ}人々の羽衣。そ。たやすく
人向よ與^シばきみのよあらま。わざの
やくよ置き終へ。早^{氣ヨカヒテサナリ}とも此衣のあらま。
さそひ天人よそ。おまきわや。さもあらじ
ませの寺特よ。留め置き。國の寶と
あまじゆきあう。夜をよまきあらま。
悲^{シテ}やも羽衣あくて。飛行の道も
絶え。天よ停らし事も。やもすま。
さうそん返^スたび終へ。早^{ヨワク}此御詞を

向くよも。しよ。白龍力ナガラをえ。もと
よう此身サテあまき。天の羽衣アマハヂを
かた上サカタ
かう。そて立ちのけぐ
かう。さくも。洞アマツあまき鳥トリのかくそ
シテシテ抑オニテ、撫ハセ
昇アゲルる。今ハかま
すまへ。が夜ヤクか
あり。シテシテ地ジよみ住アメニタめ。下シタ
めど。一宇書
早サラり。引ハリさ
白龍衣アマラヨウイをほたねば
かゑカエり。一宇書
早サラり。引ハリさ
めど。一宇書

早トサシ方もガハト、地上スル處の露の豆葛。かづの
花もさやく。天ノ五穀も日の前
見えそ。霞立つ。雲路感ひて。行へ知ら
見れ。山。ふも。地下歌。中サブリ。
抱子ニ合ア。ト。み駆れ。室より。行く
度の美。ま。き氣色。わから。上歌。引キタテ。
頻伽の駆れ。馬。ウ。ササ。迦陵頻伽の駆れ。

駄れり。聲今更よ懇ある。雁の帰り
行く。天跡を向けどあつかいや。半鳥鶴
の沖つ浪。くら帰る春風の空よ吹く
までもうかや空よ吹くまでもうかや。
早朝 カツテ
さよ申は。ア姿を見事め。餘りよ声痛
やくほ程よ。衣を返す申がうござひよ。
シテ 補テ引立テ
あら嬉しや此方へ賜もうひへ。轉らる。
早朝 ハテ

手シテ奉ササイト出舞カニ。やまてひえよ席テシらよすをえたり。
此悦びよとてむなれ。人向ミコトの虚モロ遊イウの
形カク見ミの舞。日宮ヒマツキを廻アゲらも舞曲モリあり。
唯今とて奉ソオつ。せのうちき人ヒトよ
傳アトべ。さうあづら。衣アヒトてふ。わざハサま。

さうかしてまづは下絵へ。引や此衣を
ほ下あべ。舞曲をもす。其まよ。天より
あがり給ひばき。いや矮く人向よあつ。

天より鳴。あまみのを。草上^{サカシ}あら恥りやさら
ぞと。羽衣をほ下興あれぞ。物者少めへ
衣を著つて。寛^{イハシ}裏羽衣の曲をも
天の羽衣風よ和。雨よ同ふ花の袖。

早^{サラ}
一曲を奏で。舞ふとあや。地次第上^{シテシテ}アリ
駿河舞。東海^{アシタ}の駿河舞。此時や。然る
から。草上^{サカシ}打舞。それ久方の天とし。二神
出せのを。十方世界を宣め。よ。空へ
限もむれど。久方の。空とん着づけ
た。然うよ。宮殿の有様。玉帝
の修理と。あべりて。白衣黒衣の

天人の數を三五よ分つて。一日一夜の
天女。奉仕を宮め役をも。われも
數ある天女。月の桂の身をわけて
假よ東の駿河舞。せよ傳へたる曲と
春霞。たるひきよけり久方の。
月の桂の花や。咲く。げよ花さづら色め
く春のあらわ。面白や天もとで。と

も杪あり。天つ風。雪の通路吹きそぞよ。
少女の姿。志す。留ありて。此ね原の。
春の色を三保う崎。日清見鷺富士の
雪しづれや春の晴。たゞひはも松風も
長向も浦の有様。其上天也。何を隔
てし玉垣の。外の神のまよそ。日も
暁ぬ日の本や。君代へ。天の羽衣

まれよ来て 地撫づより盡きぬ巖巖ぞと。
向くも妙あり東歌。聲添へて數との。
笛笛琴琴笙管候孤雲の外よえうちえ
ちて。落日のくれあるは蘇命跡の山
をうつよ。緑にはよ島嶼。拂ふ嵐よ
花あつて。げよ雲を廻らむ。白雲の袖ぞ
然ある。南無帰命向天子。本地

大勢至 地上 あづま遊の舞の曲

序ノ舞

シテカヒトアラウンタマツリテ
あづひハチモツミ空の緑の衣
立つ霞の衣 色脛も妙あり少く
の裳襦 地上 さゆよ。すゆよ調符の
上元大、え、大ニアリ、ウイ
花やかずの丈の羽袖。靡くも返をも。
舞のそで 破ノ舞・東籬の數よ。東籬の
数よ。其左も月の。左も月の。三五夜中の。

室。よし。萬月。眞かの景。と。あり。は願圓滿
 國土成就。七寶充萬の寶を降らし。
 國主よこれや。施給よすら。積よ。時移
 りて。矢の羽衣。浦風よたあびきたるべく。
 三保の松原。浮島。雲の愛鷹山や
 富士の高山嶺。かきよありて。すまつ
 室の。雨殿よまぎりて。失せよけり。

紅葉狩

汎説

鰐五将軍平維茂、戸隠山に於て鬼女を退治せし事を作れる曲なり。能たては最初山に紅葉を掃したる作り物を舞臺に当す。次第の雅子にて華麗な舞衣を以せし美女(シエツレ)三人、五人或は七八人を舞ひて出て、次第より上歌までを渡り、後は山路に紅葉狩する曲を云ふ。こゝに初言方の供女出で、幕を張り宴席を設くることを述べ。一声の雅子にて雅庭(わき庭看(主衆)役)役人を遣へて草や櫛掛に列びてサシ以下を渡り、席将に奉れる旨を述べ。次いで遙に美女觀桺の宴を開けると見て怪しう、性名として之を尋ねしめしが、遂に妖鬼の計に陥り、宴席に引き入れられ、酒を飲み酔ひ伏すと、鬼女は毒ひながら見すまし作り物の中に隠れ、ツレ亦尋に入る。(中入)代りて同様言葉の神現はれ、八幡宮の使として靈劍を维度に受け鑿若して走る。雅庭、宴臺にて驚き醒めて起ち上れば、此辻は雷大乱れ大風吹き物鳴き山中の光景を證し、もしも鬼神の体と現はして作り物の中すば躍り出で、雅庭に對ひ主廻りとなす。鬼女は敵は木にて巖石に擬したる作り物に取付くを维度引き下し切りたふすに終る。此曲五番目切能に用ひられ、前半は優美華麗、後半は雄渾激歎にて二石春中の隙作に數へらる。

誰方、節板、記入の解説

前シテは美女なるども鬼神の假裝せしものなればさうぞ淫を静に取らす。聲及び心ばかり堪味を今ませ掌の女の如く優雅を本とせず。故に「静に明か」といふも三番目物の如く幽言ちる味を持つ慶更に無し。

次第一(一枝表) 次第は常に上音に出づ。ハモリナ浮かせて、もみぢより中音に下がり、第二

句(透し)の「時雨」上音に渡し、^{トニ}きて再び中音に下り、漸次浮かせて上音に張り、^{トニ}もみぢにて三たび中音に下り、第三句に詠ひ續け、^{トニ}たゞりんにて真の下音となる。

女にて外、今ははや。(同)「は」二字疾、^ハは一字疾。共に其前字を浮かすべからず。

淮白雪の。(同)「雲」たて浮かし、^{トニ}にて中に詠す。サシの最初の「下」は常に中音シとなり、サシの中音は他の場面に於ける中音より高きものなること既に屬く説明せり。

さみしきた、庭の白鳥。(同)「に」^{トニ}若にフリウキと稱し、振りつ、浮かすなり。竹生島の春

風(透し)の「ひ」とはサシの中音シの次にあるハリなれば普通サシの上音より一段高く十音に張る。「^ミ」は前例と同じく中音シなり。

下最力ヘテ(二段表)これまたサシの調子なりしが、こゝより下歌と多くして音調を變へて普通の中音にて生づ。サシは指甲が^{トニ}りの声、下歌は指甲が^{トニ}りたる声とも謂ふべし。

上最、下紅葉(同)上歌の初の五文字に勿切あるものは引かずには美しく詠ひ切る。
夜の間の露や邊のつらん(同)上歌の通しの一句シテツレ同吟の際はツレのみにて詠す。
本のもと(三段表)「^{トニ}」に持ち一あり、「^{トニ}」の音より下ぐるにあらず、前字の上音を受け、一字にて上音より中ノウキを経て中音まで詠ひ下ぐるなり。斯る方を「掛ケ下ゲ」と云ふ。
立ち寄りて、^{トニ}指を(同)「^{トニ}」の色春、ヤヲハの間あれば「^テエーウーン」と大きく詠ひ、「^{トニ}」は句中にある色春となれば「^テーシー」と普通の春に詠ひ。共に音尾を落せども別に「下」の記さなければ、次の字は中音に復す。

鶯場の末(同)氣色かな(三段表)「^{トニ}」下ノ中、^{トニ}も下ノ中、^{トニ}かな下ノ中に週し下音に詠す。

かなふまじと(三段表)「^{トニ}」^{トニ}の一字疾、地渾しの處なれば音尾を抑ふ。

うち^{トニ}けで(四段表)サシの中音シ、一段表淮白雪のと同音位に下ぐる。

色見えけるかいかにせん(同)「^{トニ}」^{トニ}ハリのハリはサシの中音シより来るハリなれば、普通の上音より一段高く張る。「^{トニ}」^{トニ}はがのイロ週シの下がりたる音位を受けて「^{トニ}」の入り週シを大きく詠ふ。「^{トニ}」の週シにて下り、「^{トニ}」の音首と同音位にありて入り週シを詠ふにあらず。

立ち寄りて(五段表)「^{トニ}」の生ミ字より中音シに下ぐ。

クリ(五段表)クリ地は特殊の節附ある處は大きく、直節の處はさらりと運ぶ。句末の字直節なれば引くことをサシに同じ。

ためしとかや本エリ(同)「^{トニ}」^{トニ}は中音の入り週し、例とあるも同じ。本エリはクリ地の終り、中音位にあるもの、「^{トニ}」^{トニ}アーハー^{トニ}アーハー^{トニ}と詠ふ。

かねなるふ鹿き(五段表)「^{トニ}」^{トニ}フリウキに浮かし、「^{トニ}」のハリ普通の上音より一段高く張る。

堪へず紅葉(六段表)「^{トニ}」葉のオを三ツエリに詠ふ。

中ノ舞(同)中ノ舞は其位、静かなる序ノ舞と早舞との間にあら舞といふ音にて名づけしもの、五段を正式とするも三段に略^{トニ}す。ことあり。箇に連れて舞ふものにて詠の伴はざるものなれば、詠方に關係なし。

ワカ(同)舞の後にある短き一節の名。但し舞の後に必ず有るとは限らず。

融入ちまき(七段表)「^{トニ}」の入りの後に一音あるのみにて直に又クリに續くを以て入りの後の「^{トニ}」上音まで落す暇なく、上ノウキも^{トニ}一寸落して「^{トニ}」のクリを詠ふ。

カハル、月待つ程の(同)これまでノリ地なりしが、「月待つ」^{トニ}以下普通の調子となつたより「ガハル」と記入せらなり。

西をもぐきやうぞなき(八段表)「^{トニ}」少しおへて詠ひ切る。次の「騒がすして」の「ても同じ」。

五番目

紅葉狩

九月

ワシツテレ
鬼(大(四人又ハ三人)
平雖茂(前ハ女))
徒(セコ大ゼイ)

序次第上
拍子三合ノ
時雨をいそぐ紅葉狩。時雨をいそぐ
紅葉狩。渓き山路を轍ねじるべ
此あたりよ住む女をして
げよやあら
へて浮せよ住む女のはや。誰白雲の
ハ重袴。袴れり宿のまみきよ。人をそ
見えとね秋の末で。庭の白葛。うつうよ

小説

色も。真愛き身の顔とあやひやう。
まうかみさくまぐれ。おぐま室を眺め
て。四方の横ももうちがすよ。
づる道の草葉の色も日よけひで
ト。伴ひ出。押すか等。ト。シテ
上泉。朝カニナラリ。ト。シテ
紅葉。夜の向の露や案めつる。
の向の露や案めつる。暮雲の原へ時
より。色深き紅や。かけ行
方の山ふ。

此上歌公能ニテハ
ワキニ形アルタメ
ワキレ又ハ地ニテ
謡ア

げよ面白き氣色アドカラ黒レ唐三毛カニサナリアドカラ黒レ唐三毛カニサナリ明けぬとて。
野邊スルニシマリよりふよへる鹿の跡吹き送る風
の音よ。駒の足カネコトヨのみ勇むありカネコトヨ野聲ササギまも
らをうやたけどろの桿カサら。やたけどろ
の桿カサら。しる野の薄雲スルスムカモク分けて。行カムス
も遠アリきよかざり。鹿垣の道カミツチのすが
きよ。草ちく鹿カサガの聲シテもあう。風の行

くわせよ風の行くアリせよ い
よ誰タレあるタレ前マジよマジあマジの山マジあげよ
當アリて人影ヒメイの見えマジ。いマジある者マジぞ右
を尋マジねマジあマジはマジ。最マジつてマジ。左マジを尋
ねマジりマジ。やマジともマジよマジ。萬マジの幕マジうち
またマジ屏マジ風マジをマジ。西マジ宴マジもマジ見マジ
てマジ程マジよ。わマジじうよマジねマジ。名

わが申すを。唯かくかがとたまう。申は
早氣ラカヘ
あらか。此あたりよいかのへ
思ひよどり。よ。誰とももあへ上
萬の道のよきの紅葉狩。殊更酒宴
の早。カハナ
拍子ニ合ハセ
トと。馬よりありて、背を脱ぎ。馬より
おりて、背を脱ぎ。道を隔て、山をげの。

岩のあちちを過ぎ。ひづかひざたぐ
ひあきひづかひそたぐひあき
二字落
數あくみ身よきの山の奥よ来て。人
知りとうちみて。獨眺むづみぢ
との。色見えけり。よせしわん
誰ともあらまう。唯やどある事すよ。
ひいて志のがさう。志のがさう

きう誰ぞ。知らせぬ道の人の。
便よ立ち寄り終へか
二字音早門二字音早門

の事事や。何よりわざとばの絆へ
きた。おもねやうて過ぎ行けどあら
情ある事事や。一村雨の雨宿り二字音早門
の蔭よ立ち寄りて二字音早門一河の流を二字音早門
酌じ酒を。いそで見まを絆びきと。思す

あらも袂よまめり留められ。すともか
岩木よあらすれど。ひ弱くもまも帰る。
所ト山跡の菊の酒。竹かた苦一からむ。ひだ
げよや虎巣を出でいふへむ。ひだ
をが捨てがたき。人の情の盃の。達き弊
の子もあや
二字音早門二字音早門
林向よ酒を燶めて、
紅葉を燶へあや げよ面白や所から。

巖の上の茶籠。さすく袖も紅葉衣
の流れある。顔を顔をせの此せの人
も。思ひても胸うち騒ぐもありあり。
セト^{セト}、竹の葉の。私^{アシカ}もかよへば。
露^{ガラス}もあう。だよゆけども。思ひ^{アサリ}かもも
益^{カツキ}よ。向^{アヒタ}へぞかきう心^{ハコ}かる。さへぞ佛も
戒^ケの道^ト様^トまわへど。殊^シより飲^ミ酒^スを

・仕舞

破^ハりあ^ハ。邪^ヤ羅^イ妄語^{モモロギ}ももろともよ。亂れ
じの花^{ハナ}わづら。わづら姿^{ハタチ}とまたせよも。たぐ
ひあ^ハうの山櫻^{ヤマザクラ}。よその見^{ハシメ}る目もいゝ
あらしよ^{アラシヨ}や思^{ハシメ}てとことも
前^ハの奥深^{ハシマ}からぬ。深き情の色見^{ハシメ}そ。
かうかうとも道^トのぐ。草葉^{ハサゲ}の露^{ガラス}の
かごとくわかれて、ぞ頼む行くまを。

梨リもはうからうちつげよ。人の心ハも
志ら雲シラクモの立ちあづらへる氣色カケトがある。
中氣ヲタバサリ
かくて時刻チメ移りゆく。雲よ嵐アメニの
脅アシをあう。散ハラフりますまきの葛城カヅチキの。
神カミの奥カミの夜ヨル。散ハラフりますまきの葛城カヅチキの。
雲アメをめぐらす被ヒ。堪シテへぞ紅葉レバ。
シテカツカツたへぞ紅葉レバ。青苔シオノリの地ジ。堪シテへぞ紅葉レバ。

獨吟

青苔シオノリの地ジ。又とて涼風ヤハラギくれゆく室ムロよ。
雨ウヂうち解ハナダぐ夜ヨリ風フの。物モノ體コトブキき。山陰サンイよ
日待ヒマツつ程ヒマツシキの轉宿ツンスルよ。所シテ袖アマも露アマツク。
涼ヤハラギ。夢ユメも覺ハシマ。絆ハシマよ。夢ユメも覺ハシマ。

早アリ上アリ。覺ハシマ。絆ハシマよ。來序中入

あらうあなた。やわらかう。無明ムミョウの酒サケの
酔ソラリひ。まだらむ隙ナカニもあきうちよ。あらた

ありけり夢の告と
驚く枕よ
雷火乱れ天地も響き風をもどる。
たゞも知らぬ山中よ。おぼつちや
るうへや
オホヘタヒト
つるまんちオホヘタヒト
かぎや今までありつる
かんあオホヘタヒト
ひまの姿を懸ハシケル或
巖より火燐を放ち又虚室より燐を

陣う咸陽宮の煙のあらよ。其の
屏風の上よ高ハシケルあまりて其だけ。其の
鬼神の角ハシケルやほく眼ハシケル日月血ハシケルを向く
べきやうぞあるオホヘタヒト
を」て也ウチ维茂モロコシをともも駆ハシケルをも駆ハシケルをも
南無ハシケルハ幡大菩薩モロコシ。心ハシケル念ハシケル。觸ハシケル
抜ハシケルて待ハシケルちあづけ。微塵ハシケルよもすハシケル。

飛ハシマリひでかカツカツ。飛ハシマリひちカツカツひむカツカツと組ハシマリみ
鬼カモニ神カモニのまカモニんカモニもカモニうカモニ軒カツカツ通カツカツを所カツカツと頭カツカツを
擱ハシマリんであカモニからカモニとをもカモニと。軒カツカツはらひ
絵カツカツへばカツカツ劍カツカツよカツカツ琴カツカツへて嚴カツカツへのまカモニうカモニを。トト
あカモニうカモニ刺カツカツト通カツカツ。忽カツカツち鬼カモニ神カモニを絵カツカツへ絵カツカツ。

次第三三カタ静え
かく刺カツカツト通カツカツ。忽カツカツち鬼カモニ神カモニを絵カツカツへ絵カツカツ。

威カツカツ勢カツカツの程カツカツとそ怒カツカツうカモニけれ

猩々

汎 説

唐王得陽江に極め程々、孝子に真畫藏の酒壺を典へ、又己も酒に醉ひて舞を舞ふことを作れり。昔は前後二段あり成る曲なりしも、祝言能として漁すに短きを使とし、後世前半を省きワキの名より直に待證に纏けて半能の形式とせり。能にてはワキ名末笛にて出て、待證まで誰ひ了れば太鼓の打出しありて下端の難子あり、シテ江上に浮び出づる心にて全身赤装にて出場するなり。目出たき祝言能として常に切能に用ひらる。又能には乱とて重き習事あり。又亂の替に雙之舞、置壺、和合之舞など程々二人出でて演することあり。

謡方、節拔、記入の解説

通して祝言を旨とし暢びカツカツと大らかに達ぶべし。此曲初学者の皆古するものなれば、往々簡易なるが如く看做さるゝも、拍子の上には渡り拍子の謡方など専門家も特に注意を要する程なれば、之を嚴密に正確に達はんことは頗る難事なり。

時盡り時盡りカツカツにやカツカツにやカツカツ。剛カツカツ今上音カツカツたて出でカツカツ、カツカツの「た」を厚かせ心に掩り、「り」は中音に発すなれど、別に耳立つ程下げず、とは剛カツカツ今上音中音の音階の差甚だ近く、さしたる高底なければなり。初学者、下の字に氣を奪はれ一連に音を下げんと思ひ、渢カツカツり易けりば注意を要す。にやの「には下カツカツ、中に居し、」やは下カツカツノ中の音階にて廻し、廻しの後の音尾を抑へて下ぐ。

身カツカツとなりカツカツて外カツカツ。一枝裏カツカツ「り」では前の「にや」と同じく下カツカツ、中カツカツの音階、外カツカツの「ソオ」の廻しと下音に発す。澤陽の「二枝裏」の「のは上カツカツノ廻し、上音にて「ノー」と張りて廻し、生々字「オー」を音首と同音位の上音に復す。

卷之三

夜もすがら（同）「夜」の廻シは前に同じながら、脣は中音に發すなれど、前字の「す」を厚めにせよ。

また傾くる（同）「最初に當うが如く出で一縁り上げ、其音注を受けて地めすたの入りと註ふ。
きかづきの（同）剛今絃句の前にある常の抑へなり。

（同）「ち」にて上音となり、「た」中音、「リテ」の「ト」と「か」の回シは「ト」中
音を中音に置して下、中、下へて以降下音となる。
下端（同）下端は舞いながら出るやうの物に用ひる雑子の名。而して老いせぬや以下をサ
ガリハ地と称し、渡り拍子と称する太鼓の手あり。此箇處を拍子曰しく謡はんことは頗る
難しとせらゝるものなり。

樂の泉とも薬の水 (同) 三箇ともスクヒ藻シナリ。初にスクヒ藻シあり、次に中藻シあり、後に下となるが通則にて、藻にも次に「盈」にて申藻シナリ。浮かみ出でて下となる。

とは上ノ廻シ柔吟にも廻シの形は剛吟に因ト。もの入り廻シは廻したる後を上者ヨリテ落スニキ、上ノウキまで下りたる

耀々舞を舞はうよ（三ね表） よオは上部へにて上者を抑ふる心にて誇り、普通の中者にあ

ウキまで下ぐるにあらず。

おもいにと處さ大ききよほくはし無むならぬやう。
君君みぬ浦風の(同)一セイの潤子にて寛へたりと節大きく澄ふ。

アサシの調子にてよりかに遡る。

五番目ヨリ未(切能)

猩ショウ
オ

九
月

ワシキ元高鳳翔

次第よ。富貴の身とあつてふ。又とよ
不思議ある事のい。市井よ。あり酒を
飲む者のい。益の數へ重もひども。面
色へ更よ。寛らぎの程よ。餘りよ不審
よ。存だ。おとぞ。尋ねてつへど。海中よ。棲む
猩猩もあや。申の程よ。今日。渾陽の
江よ出で。かの猩猩を待たむや。存は

上表シカカリ
持シテ今アキラメ渾陽の江シカカリのほそりよ。渾陽の江シカカリの
ほそりよそ。菊シカカリをたゞぐて。夜シカカリもさがら。
月シカカリの前シカカリよも友シカカリ待シカカリうや。又傾シカカリく益シカカリの。
影シカカリをたゞぐて。待ち居シカカリたり。影シカカリをたゞぐて。
待ち居シカカリたり。老シカカリいせぬや。老シカカリいせぬや。
葉シカカリの名シカカリも菊シカカリの水シカカリ。益シカカリも学シカカリみ出シカカリで。友シカカリよ。あご嬉シカカリき。此友シカカリよ。津シカカリよぞうれ

一き。キ古酒と向く。キ古酒と向く。若も
ことわりや秋風の吹けども吹けども
也トシ。花一ツ一花一花一花一花一花
更よ身よ寒からド。キことわりや白
菊の。キことわりや白菊の。著せ綿を
温めて。酒をじごや酌まずよ。密人も
座贊へぞらし。キ向星へ隈もあまき
シテ。處ハ素陽の。地ニ一ウタリ。地ニ
シテ。のうちの酒宴。

シテ。中舞。猩星舞を舞ふすよ。地
猿舞。舞を舞ふすよ。キ葦の葉の笛
を吹き。良の鼓。さうと打ち合せ。聲澄
み度。浦風の。秋の調や。残るらし
中舞。ありがた。身心をあわすよ。う。
比々。より泉をたぐ。唯今迄。與よ
あり。よもづき。也。よもづき。萬代
までの竹の葉の酒。酌めどもつまむ。キ

飲めどもかくらぬ秋の夜の盃。影も
傾く。へなよ並たう是もとへとうと。
ゑひよ卧たる枕の夢の。おもひと
思へば泉とそのまゝ。盡きぬ宿とて。
めでたナヘリ。



終

